

ネット社会の新たな課題に対応するための 情報モラル問題解決力の育成

(2020年度学術研究助成基金助成金 基盤研究(C)に採択)

科学研究費補助金（学術研究助成基金助成金）が
交付された研究を紹介します。



メディアコミュニケーション学部
情報文化学科

玉田和恵 教授

Society5.0時代に向け、ネット社会において自分が問題に直面した際に、目的や解決策を適切に発想し判断できる人材を育成することが求められています。人工知能・ビッグデータ・IoTなどに対応できる高度情報人材を多く輩出する目的で小学校段階からプログラミング教育が導入され、それに多くの注目が集まっています。また、文部科学省は学校への携帯電話（スマートフォン）の持ち込みを解禁し、持ち込みの機器等も活用して学校でのICT化を進めようかという議論もなされていきます（筆者も委員として議論に参加）。

スマートフォン・タブレットなどを、これまで以上に低年齢から活用する傾向が見られ、小学校低学年の段階からさまざまな事件やSNS上でのネットいじめなどのトラブルに巻き込まれたり、引き起こしたりする事例が多発しています。また、ネットやゲームへの

過度の依存、ネット上の情報に囲い込まれ自分の好みの情報しか見ることができなくなるフィルター・バブルに翻弄され、思考が左右されるような状況に陥っています。そのために、早い段階で、道徳性+情報技術+問題解決力を兼ね備えた情報モラル問題解決力を育成することが重要となっています。

情報モラルの指導法を検討する場合、小学校段階では道徳教育との連携を図るために、日常モラルと共通の枠組みで扱える指導法が、中学校段階以降は問題解決の枠組みの中でトレードオフ問題として捉えさせる指導法が必要だと考えます。これまでに、本研究グループが開発した「3種の知識」による指導法と「縦糸・横糸モデル」に基づく指導法を統合してそれらを系統的に指導するカリキュラムを構成します。また、それらの指導法を実践的に検証し、かつ、教師教育に結びつける

ために、e-learning型のゲーミング教材を開発する予定です。

本研究の問い合わせは「現状の子ども達は無鉄砲にICTを使うか、与えられた使い方で満足するかの両極端であるが、問題解決に焦点を当てることで、トラブルを回避する慎重な姿勢と、ICTを幅広く活用する積極的な姿勢とをバランスよく身につけた子ども達が育成できるのではないか」という点にあります。